

「開国・開港Y150通信」(第2号)



「開国・開港Y150」は、『海』、『街』、『自然』が生きる横浜の3つのエリアで横浜の魅力、歴史、未来を満載した大祭典を繰り広げます。ベイサイドエリア(みなとみらい21新港地区周辺)は、横浜の原点でもある海と港の景観の中に、大型エンターテインメント展示、大型映像、催事会場などを多彩に展開。夜間は華やかなナイトショーやライトアップが賑わいを演出します。

ヒルサイドエリア(ズーラシア隣接地区)では、豊かな自然の中に子供から大人までが集まり、ワークショップをはじめとする様々な市民創発プログラムを展開します。マザーポートエリア(横浜駅周辺～山下・山手地区)では、横浜の繁華街と商店街が連携し、「横浜回遊ルートマップ」など街全体が活気に溢れます。

開国・開港Y150アクセス案内	
	<p>B ベイサイドエリア (みなとみらい21新港地区周辺) 会期:2009年4月28日(火)～9月27日(日)10:00～22:00 みなとみらい線「馬車道駅」または「日本大通り駅」から徒歩5分 もしくは、同「みなとみらい駅」から徒歩10分 J R・市営地下鉄「桜木町駅」から徒歩10分</p>
	<p>M マザーポートエリア (横浜駅周辺～山下・山手地区) 会期:2009年の年間を通じて展開 みなとみらい線 横浜～元町・中華街間各駅 下車 JR 横浜～石川町駅 下車 市営地下鉄 横浜～伊勢佐木長者町間各駅 下車</p>
	<p>H ヒルサイドエリア (ズーラシア隣接地区) 会期:2009年7月4日(土)～9月27日(日)9:30～17:30 ※但し、8月の毎週土日及び9月19日から27日の9日間は、9:30～20:30 相鉄線「鶴ヶ峰駅」「三ツ境駅」または J R・市営地下鉄「中山駅」から「ズーラシア行」バスで約15分</p>

平成20年10月22日
 財団法人横浜開港150周年協会 広報・宣伝部 統括部長 阿部 龍浩
 電話:045-222-1508

世界有数のトリック・アーティスト カート・ウェナー氏による黒船アートが横浜港に出現

「開国・開港Y150」会期中の、2009年6月2日(火)～9月27日(土)の118日間、象の鼻会場にて「トリックアート」を展示することが決定しました。作品は、トリックアートの分野では世界的に評価の高いカート・ウェナー氏が制作いたします。

建物や路上をキャンバスに、ストリートペイントの作品を数多く制作。今回Y150では、開国にちなんだ「黒船」をテーマに、象の鼻会場の広場に約70平方メートルの巨大トリックアートを、黒船の実物スケールを実感できる大作として展示予定です。

今回は、ウェナー氏の黒船アートへの意気込みと制作構想を徹底紹介。



ベイサイドエリア「象の鼻」会場



カート・ウェナー氏

<黒船アートのコンセプト>

東洋と西洋の文化をうまく融合し、船を上から見下ろしたデザインを構想中。当時の日本人にとって黒船は「脅威」や「驚き」であったり、「よい方向へ進む絶好の機会」と考えていたり、様々な感情が交錯していたと思います。それらの「想い」や貿易・文化などの交流によって変化した、日本にとっての素晴らしい影響を表現できれば嬉しいです。

<日本へのメッセージ>

私の作品はパブリックアートのため、芸術作品として敬意を払ってくれ、作品を汚さないことが非常に重要です。そういった観点で、日本人は「モノ」に対して非常に礼儀正しく、きれい好きなので、日本で作品を公開することはとても嬉しいです。私の作品は直接的または間接的にルネサンスを取り入れています。今回は東洋の要素を多く取り入れる予定です。ぜひ楽しみにしてください。

「トリックアート」とは

正式には「アナモルフォーシス」と言い、平面に描いた絵が見る角度などにより、3Dや歪みのない絵に見える錯覚を利用した技法。欧米では、15世紀から現在まで行われているアートで、サルバドール・ダリもこの技法を用いた作品を残しています。



Reflections



Beowulf-artist



Muses



Cocito

Y150はじまりの森（新港地区8街区） 横浜の歴史に親しむ「よこはま物語」概要

「ペリー応接の間」「横浜はじめてワンダーランド」など、 開国・開港の時代へタイムスリップ

開国・開港から150年、横浜の歴史を集約したゾーン「よこはま物語」の基本概要が決定しました。

「よこはま物語」ゾーンは、「ペリー応接の間」「横浜はじめてワンダーランド」「横浜開港物語」「横浜ショーケース」「たまぐすの学びの舎」の5つのコンテンツで構成されます。それぞれのテーマに沿って、横浜150年の歴史や開国・開港の時代が映像や体験型展示で展開され、開国・開港の時代へタイムスリップしたような体験ができます。

「ペリー応接の間」では、浜辺に建てられた応接の間やペリーを応接した場面を紹介、開国・開港の時代をリアルに体感することができます。「横浜はじめてワンダーランド」では、横浜から日本全国へ広がった洋食、洋装、スポーツ、乗物などを弁士の説明とともに、見て、触れる体感型展示で紹介、日本の近代化に果たした横浜の役割を楽しく知ることができます。

また、「横浜開港物語」は、横浜港の歴史を映像で紹介するシアターであり、横浜の先人達の足跡をたどります。さらに、横浜地元企業が出店する「横浜ショーケース」や、横浜を楽しく学べるワークショップ「たまぐすの学び舎」も予定されています。

「よこはま物語」実施概要(予定)

- 【開催】 2009年4月28日(火)～9月27日(日)
- 【会場】 ベイサイドエリア「Y150はじまりの森」
(新港地区8街区) [有料会場]
- 【展開内容】 「ペリー応接の間」「横浜はじめてワンダーランド」
「横浜ショーケース」「横浜開港物語」
「たまぐすの学び舎」の5つで構成

横浜150年の軌跡(年表)



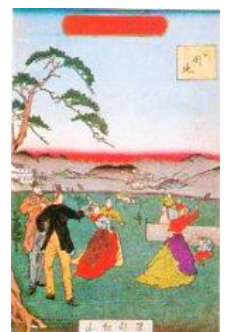
ペリー肖像



外国人衣服仕立之図



横浜異人屋敷之図



横浜名所 公園地(テニス)



横浜開港物語 シアター



蒸気車往返之図

※写真はイメージです。展示内容は変わる場合があります。

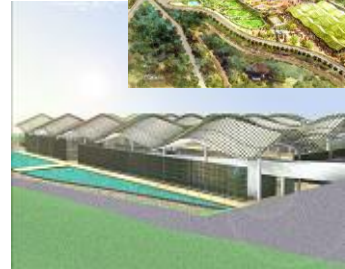
「ヒルサイド・Y150つながりの森」 会場のシンボル「竹の海原」製作プロジェクト、10月4日(土)ついに始動！

「ヒルサイド・Y150つながりの森」の会場のシンボルとなる、日本最大級の竹を使った大屋根「竹の海原」製作プロジェクトが、10月4日(土)からいよいよ始動しました。会場となったこどもの国(青葉区)には、多くの横浜市民が集まり、こども連れの家族など100名が参加しました。

初めて竹を伐採する参加者も指導員に竹の選び方やノコギリの使い方を教わり、伐採に挑戦。竹が切り倒されるたびに「オーっ」という歓声と拍手がわき起こっていました。2時間の作業で切り出された竹は102本。この竹が竹の海原で使用されます。

また、会場では伐採した竹を使った竹工作教室も開催され、参加したこども達は竹ぼっくりやケンダマづくりに夢中になっていました。

この「竹の海原」製作プロジェクトは11月、12月にも横浜市内の公園で開催され、延べ930人の参加者を募集する予定です。



【11月、12月の募集概要】

※まだまだ募集しています!!

☆11月の伐採 10月1日(月)より受付中 ※先着順

- ①11月 3日(月・祝)横浜市環境活動支援センター(保土ヶ谷区)定員30名※11月3日のみ当日受付(10:00~)
- ②11月 9日(日) 北八朔公園(緑区)定員100名
- ③11月15日(土) こどもの国(青葉区)定員100名
- ④11月22日(土) 大塚・歳勝土遺跡公園(都筑区)定員100名
- ⑤11月29日(土) 本郷ふじやま公園(栄区)定員100名

☆12月の伐採11月4日より受付開始 ※先着順

- ①12月 6日(土) こどもの国(青葉区)定員100名
- ②12月13日(土) せせらぎ公園(都筑区)定員100名
- ③12月14日(日) 港南中央公園(港南区)定員75名
- ④12月21日(日) 上山ふれあいの樹林(緑区)定員75名

☆各会場とも9時30分集合~16時終了予定(※雨天中止) ☆参加料:無料(但し、会場までの交通費、昼食等参加者負担)
※どなたでも参加できますが、中学生以下保護者同伴、小学生以下は竹工作教室のみの参加となります。

【お申込み】 FAX(045-662-6483)またはE-mail(hill@yokohama150.jp)で氏名、年齢、住所、電話番号、参加会場を明記し、(財)横浜開港150周年協会 ヒルサイド市民参加事務局「竹の海原製作プロジェクト」係までお送りください。

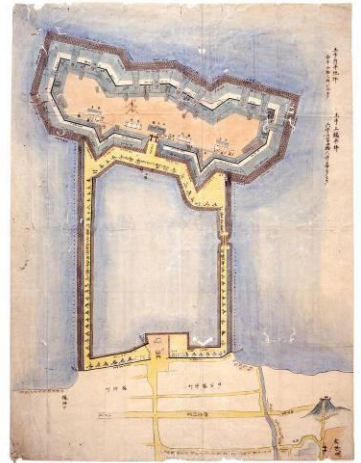
【お問合せ】 ヒルサイド市民参加事務局 TEL045-662-6482 (月~金:午前10:00~午後5:00)※祝日を除く

Y150 横浜歴史コラム(第2回)「横浜開港と神奈川台場」

都内のお台場だけでなく、神奈川県にも「神奈川台場」が存在します。お台場は外国船に対する防備を目的に東京湾内に築かれたましたが、「神奈川台場」は横浜開港に伴って、開港場を防備し、あわせて諸外国との外交儀礼上の祝砲・礼砲を発射するため、幕府の命令で松山藩(現在の愛媛県松山市に城を持っていた藩)が1859(安政6)年に築造に着手しました。

設計したのは勝海舟で、総工費は約5万両から6万両(米価で換算すると現在の約30億円相当)、築造地点は開港場の対岸にあたる神奈川宿の沖合約200メートルで、広さは約8000坪(約2万6400平方メートル)もありました。完成は1860(万延元)年夏で、海岸部を埋め立てるため、各地から多くの労働者が集まり、関東一円からは石材などの建築資材が運ばれました。

完成した台場は巨大な石垣の上に3メートル以上の土居をめぐらし、14門の大砲を設置。1899年に廃止されるまで祝砲や礼砲を発射し続け、日本を代表する国際港横浜にふさわしい施設として評判になりました。本年6月、神奈川区役所は、台場の調査に着手し、遺構の保存と整備を検討しはじめています。今回発掘されたのは、砲台の人工島と陸とを結ぶ通路部分で、台場が描かれた古地図(右図参照)にある木橋周辺にあたります。物資や砲弾を積んだ小船は木橋の下をくぐって通航していたと言われ、調査によって遺構の中でも最も重要な場所の姿が明らかになりつつあります。



横浜開港資料館蔵
「神奈川台場図」

<監修> 西川武臣(横浜開港資料館・主任調査研究員)
<参考> 神奈川新聞社「神奈川新聞」(2007/06/02付)

Y150 横浜はじめて物語(第2回) 牛鍋発祥地

ロジャースというイギリス人貿易商の回顧談によると、彼が最初に牛肉を口にしたのは、1860年(万延元年)、数人の居留民が共同で牛を買い、元ヘンリー・エリス号の船大エックが横浜ホテルで屠畜したものでした。同年中に開業したアイスラー・マーティンデル商会が最初の食肉業者のようです。同商会を継承したキャメロンや翌1861年(文久元年)に開業したベイリーはいずれもヘンリー・エリス号の元船長、キャメロンから仕事を引き継いだヘンダーソン&ウェストの経営者ヘンダーソンも元船長でした。食肉業では船員の出身者が大活躍しています。『横浜開港側面史』という文献によると、入船町で伊勢熊という人が牛肉の鍋売りを始めました。『横浜市史稿』の伝える「古老の談話」では、1862年(文久2年)、「今の住吉町五丁目か入舟町かの土手」で居酒屋をしていた伊勢熊という人が、「牛鍋屋」を開こうとしたが、妻が反対したので店を半分に区切り、その片方で営業を始めたと言われ、これが牛鍋の発祥とされています。



「牛鍋屋」
仮名垣魯文『牛店雑談安愚楽鍋』
(明治4年)より

<監修> 斎藤多喜夫(元横浜開港資料館調査研究員)
<出典> 横浜開港資料館「横浜もののはじめ考」(P42~45)

Y150人物クローズアップ(第2回)

ヒルサイド Y150つながりの森 創発市民メンバー紹介

『ヒルサイド・Y150つながりの森』では、横浜市旭区の横浜動物の森公園の中、よこはま動物園ズーシアの隣接地区で、「次世代」、「自然」、「アート」などをテーマとする150を超えるプロジェクトが展開されます。『私からはじめられるこれからの150年』を参加テーマに集まった市民スタッフが、2008年1月にスタートした創発支援プログラムにより、様々なカタチの『対話・参加・体験できるプロジェクト』を開発中です。そのメンバーとプロジェクトを紹介します。

バベルの塔



伊藤 久美子(いとう くみこ)

普段は花を題材とした油絵を描いている、という画家の伊藤久美子さんは横浜市南区 在住。いま、伊勢丹や丸井での個展に向けた準備にも取り組んでいるそうです。そんな伊藤さんがヒルサイドに応募したきっかけは、横浜の地域SNS(ソーシャルネットワークワーキングサービス)『ハマッチ!』の仲間たちがパソコン通信やネット上から飛び出して、実際に 集まる“オフ会”に参加した時のこと。その会場にあったヒルサイドの申込書にみんなが応募していたので、私も!と思い一緒に申し込んだといえます。

そして立ち上げたのが、ヒルサイドにバベルの塔を作ろう、という構想のプロジェクト。「旧約聖書では混乱を生じてしまったバベルの塔ですが、天まで届けという思い、モチベーションのすばらしさを、Y150では言葉も性別も世代も何もかも分け隔てなく、一緒になって作り上げられたら・・・」。プロジェクトメンバーと木製の骨組みを造作し、イベントでは来場者と一緒にレンガをとりつけていく。私たちが同じ地球に住まう住人であることを横浜の地でもう一度認め合えたら、と出展に向けた情熱はますます高まっているようです。

織るってこんなに楽しい

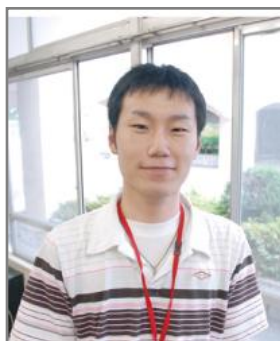


関原 ももこ(せきはら ももこ)

1968年に大阪で生まれた手織りの手法“さをり織り”。その一番の魅力は「型にはまらず、誰もが好きなように織れるところだ」と語る関原さんは、横浜で“さをり織り”の教室に携わりつつ、NPO法人「さをりひろば」にも所属。今回の出展のきっかけも、2005年愛・地球博の市民パビリオンに名古屋の仲間が参加していたため、地元横浜で何かできるなら私も、との思いで決意したそうです。

織物には出来上がっていく過程が目に見えてわかる楽しさがあり、しかも“さをり織り”は思いのまま自由に織れるため、お子様も年配者もみんなが楽しめる・・・。ヒルサイドでは、実際に織り機を使って体験したり、いろいろな人の作品を見ることで“さをり織り”の魅力を知ってもらう。また、みんなそれぞれに違った個性を持っていて、それは素晴らしいことなんだ、ということを感じてもらえたら、と広い視野で取り組む関原さん。“150周年”の150にちなんだ企画も進めているようで、これからますます活動に熱が入りそうです。

エコキャッププロジェクト ～身近なエコから世界の子供を救おう～



宮田 裕輔(みやた ゆうすけ)

「たまたま、地元のラジオ番組でエコキャップのことを紹介しているのを聞き、捨てればただのゴミなのに人の命を救うことができるのを知り、感動しました。」と語る宮田祐輔さん。老若男女が集う市民創発プロジェクト参加者の中で、25歳以下の参加者が集まる“U-25プログラム”に参画したひとりです。ペットボトルのふた＝エコキャップを集めることで、コンクリートを流し込む型枠に使うベニヤ板の代替商品原材料としてリサイクルすると、ポリオワクチン一人分の代金になる。・・・世界の子供たちを救える!そして、ヒルサイドでライブを計画していた他のメンバーとともに「エコとミュージックの融合」を考え生まれたのが今回のプロジェクトとのこと。

宮田さんたちはすでに、投げ銭のかわりにエコキャップを投げてもらおう路上ライブ『エコストリート』や、エコキャップの持ち込みで割引になる『エコロック』を横浜市内で開催。今回のアクションから、より多くの人がこの運動に対して理解を示してくれたら、と言う宮田さんは、この秋からNPO法人エコキャップ推進協会でも活動中です。

Y150人物クローズアップ(第2回)

2009年(平成21年)年に横浜は、1859(安政6)年に開港してから150周年を迎えます。



横浜開港150周年協会会長

佐々木 謙二(ささき けんじ)

当時横浜は、「横浜市歌」(森鷗外作詞)で「むかし思えば とま屋の煙 ちりりほらりと立てりしところ」とうたわれる、戸数100ほどの半農半漁の寒村でした。

開港によって、横浜は、開国日本・新生日本の象徴となり、内外から多くの人々が集まり、世界との様々な交流が始まるなど、まさに横浜の開港が近代日本の幕開けとなったのです。

横浜開港150周年記念テーマイベント「開国・開港Y150」は、「横浜の開港・近代日本の幕開け」から150周年を記念し、横浜から世界や未来に向けて発信する50年に1度の大会イベントです。

神奈川県民、横浜市民はもとより、国内外から来街される皆さまに、横浜の150年の歴史、活力、そして未来像や地球環境問題、科学技術などに直接触れることができるような、素晴らしい機会となって欲しいと願っています。特に、次世代を担う青少年、子どもたちに近代日本の歩みを学んでもらいながら、未来へ夢・希望・誇りを持ってもらえるようなイベントになるよう、取り組んでいます。

また、神奈川県内市町村、開国5カ国、開港5都市などとの国際交流や地域交流を深めて、地域経済の活性化や産業の発展につなげていきたいと考えています。

そして、この「開国・開港Y150」、コンテンツの内容がいよいよ明らかになってきました。日本初上陸、フランス・巨大スケールスペクタクル劇団「ラ・マシ」の横浜の街を舞台に繰り広げられる巨大生物オブジェのパフォーマンスは、圧巻です。岩井俊二氏プロデュース近未来ファンタジーアニメ「BATON-バトン」、アニメーションというジャンルを超えた魅力あふれる作品です。その他にも宇宙飛行士 向井千秋氏 原案、シナリオの直径20m巨大バルーンによるナイトショー アースバルーン「HOME」、最先端技術を駆使したスーパーハイビジョンによる大迫力映像シアターなど魅力的なコンテンツが次々と登場します。

横浜開港150周年記念テーマイベント「開国・開港Y150」、みなさん、どうぞ、ご期待ください。

佐々木 謙二(ささき けんじ)

1938年生まれ。横浜商工会議所会頭、日本発条株式会社代表取締役会長

報道関係者からの問い合わせ先

開国・開港Y150広報事務局 金垣・麦谷・平手

TEL 03-3403-5139 FAX 03-3403-0508